

令和元年度3学期始業式 校長式辞（1月8日）

あけまして、おめでとうございます。2020年がスタートしました。また、令和元年度の3学期が始まりました。この場で、皆さんとともに集まることができることをたいへん嬉しく思います。

皆さんは、この2020年を、この3学期をどのように生き、過ごしますか。

新しい年、未来へ向けてという観点では、高い志を持って社会に貢献し、大学や大学の向こう側の社会で生き抜いていくため、一人ひとりにとって充実した年にしてほしいと思います。

3学期ということであれば、例えば、今朝の、学年ごとの掲示板には、「いよいよ3年ゼロ学期、始め方が肝心。まずは宿題考査。よいスタートをきろう。」「今やることすべてが実となり、身につくとき。やれば必ずできる。」等の学年団の先生からのメッセージがあります。

未来に向けての大きな目的と日々の取組を、しっかりと繋げていくことが大切です。

私は、年末年始に、朝日の生徒のうち、希望者が参加するいくつかの講演会等に参加しながら、大きな目的と日々の取組の繋ぎ方について考えました。

例えば、本質的で、深い理解に到達するためには、決して答えを見ず、ひたすら考え、問題の解き方を自分で見つけ出すこと。話すべき深い内容を獲得するためには、深い理解を伴う知識が必要であり、将棋の藤井聡太氏は、「頭が割れそうなくらい将棋のことを考え続けた」と対談で語っている。これくらい考えて、話すべき内容ができる。

これらの講師の先生のことばに、共感するとともに、自分だったらどれくらい出来るのだろうか、辛いなあとも思いました。

その後の、数学の模擬授業では、時間をとって、しっかり考えるところと、さっと答えを解説するところがはっきりと切り分けられていました。この授業を見たとき、無理なく繋ぐ方法の一つは、取組にメリハリをつけることだと思いました。当たり前のことですが、気持ちはと

でも楽になります。

また、別の繋ぎ方の方法について考えたのは、新しい時代のリーダーシップについて、生徒がグループで協議するところでした。ここでは、次の三つの場面が印象に残りました。①エアコンの風が嫌そうだったグループのメンバーに、風の当たらない場所を指して、「ここへおいでよ」と声掛けした場面。②机と机の間に自分の椅子を動かして、協議しやすい空間をつくった場面。③自分が考えてきた意見をメンバーに伝えるとき、相手を読みやすい方向にペーパーを見せながら話しをした場面。

これらの行動は、メンバーが議論に集中し、お互いの意見を正確に共有するために有効なものです。リーダーシップについては、権限のある特定の人の良い命令の出し方という従来の考え方から、グループのメンバーが代わる代わる発揮するリーダーシップへの転換について、2学期始業式で話しましたが、その実際を見ることができました。目的のとらえ方を変えると、日々の取組がしっかりと目的に繋がる例です。

このように、目的と取組の繋ぎ方は、多様であり、一人ひとりが自分にふさわしい方法をとればよいと思います。

そして、どのような、未来の目的、日々の取組、それらの繋ぎ方をするにせよ、前提となることは、生きて、日々生活していることです。このことは、正月に、映画「男はつらいよ」を見て、しみじみ感じました。

2020年、そして3学期、皆さん一人ひとりが、一人ひとりの在り方で、成長することを期待して、始業式の式辞とします。

(県立岡山朝日高等学校 校長 竹田義宣)